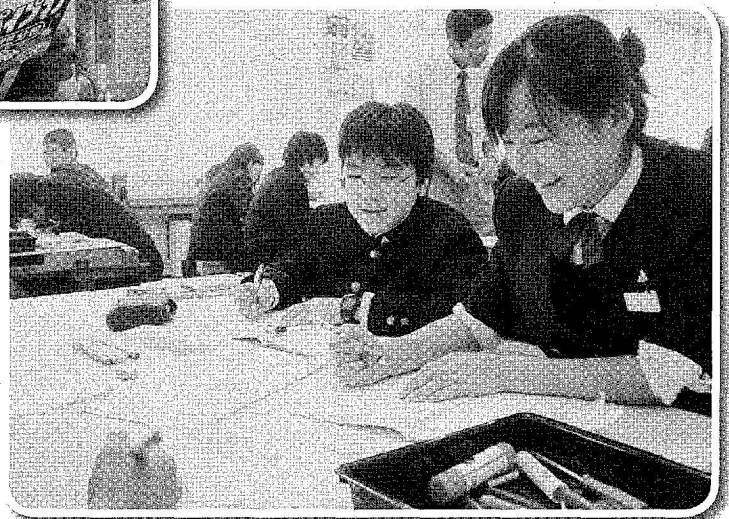
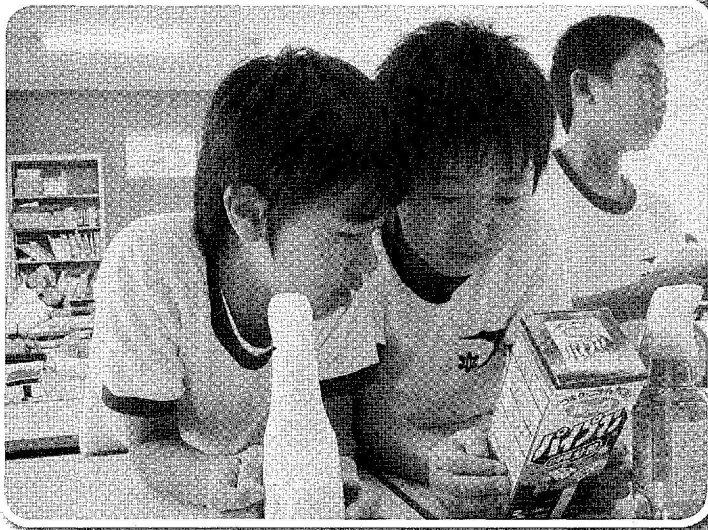


第1章

附属長岡校園連携研究の取組



連携研究主題

「創造的な知性を培う」

「創造的な知性」：新たな概念、認識、価値観を創りあげる能力

私たちは、幼・小・中12年間で求める人間像を「個性的で豊かな人間性をもつ子ども」と描いている。その実現のためには、子どもの「創造性を伸ばす」とことと「豊かな知性を育てる」ことが大切であると考え、連携研究主題を「創造的な知性を培う」と設定した。

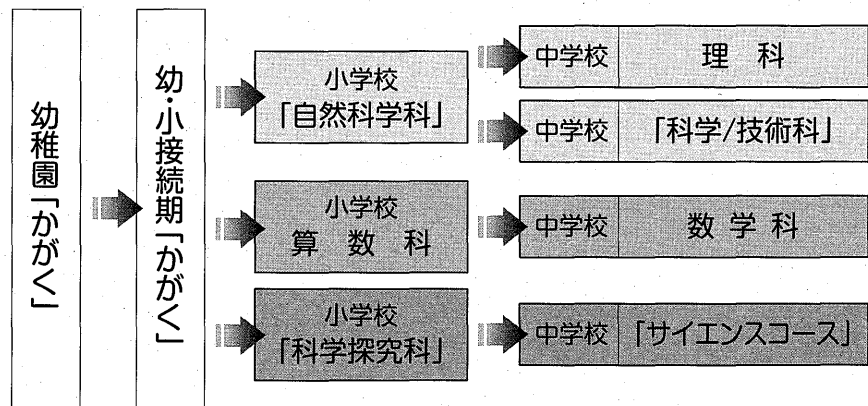
子どもが、新たな概念、認識、価値観を創りあげることを積み重ねて、校園全体で「創造的な知性を培う」に迫るために、「感性」「科学的なものの見方・考え方」の段階的なはぐくみに着目し、これまで各校園独自に取り組んできた研究の成果を基にしながら、幼・小・中連携研究を平成15年度にスタートさせた。

1. 第1次研究のまとめ～文部科学省指定教育課程研究開発学校としての取組～

附属長岡校園は、平成15年度～18年度の4年間、文部科学省の研究開発学校の指定を受けた。研究開発課題「創造的な知性と自然との共生の心を培う『科学的な感性、科学的なものの見方・考え方』をはぐくむ幼稚園・小学校・中学校の12年間を見通した教育課程の研究開発」に向け、先進的で提案性のある幼・小・中連携の姿を示そうと新設教科の設定、理数系教科の時数増を行い、教育課程の改善に取り組んできた。

カリキュラム開発

科学教育に重点を置いた3つの教科連携を構想し、幼稚園・小学校・中学校のなめらかな接続を目指す連携教育課程を編成した。



授業改善

目指す子どもの姿を具現していくため、子どもが「科学的な感性、科学的なものの見方・考え方」を働かせる学習の様相を整理した。

- もっとかかわりたいとの思いを高める
- 解き明かしたいという思いを高める
- 考える対象を広げていこうとする

既存の概念、認識、価値観のとらえ直しへの意欲の高まり

「科学的な感性」を働かせる

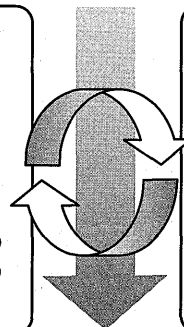
- 科学的に追求することの価値への気づき
- 解決への見通しをもつ
- 推論、試行、観察、実験に向かうとする

既存の概念、認識、価値観の
とらえ直しへと向かうための
観点を絞り込む

「科学的なものの見方・考え方」を働かせる

- 連想する
- 比較する
- 逆に考える
- 分類する
- 条件を制御する
- 要因を分析する
- 多面的に見る
- 関係付ける

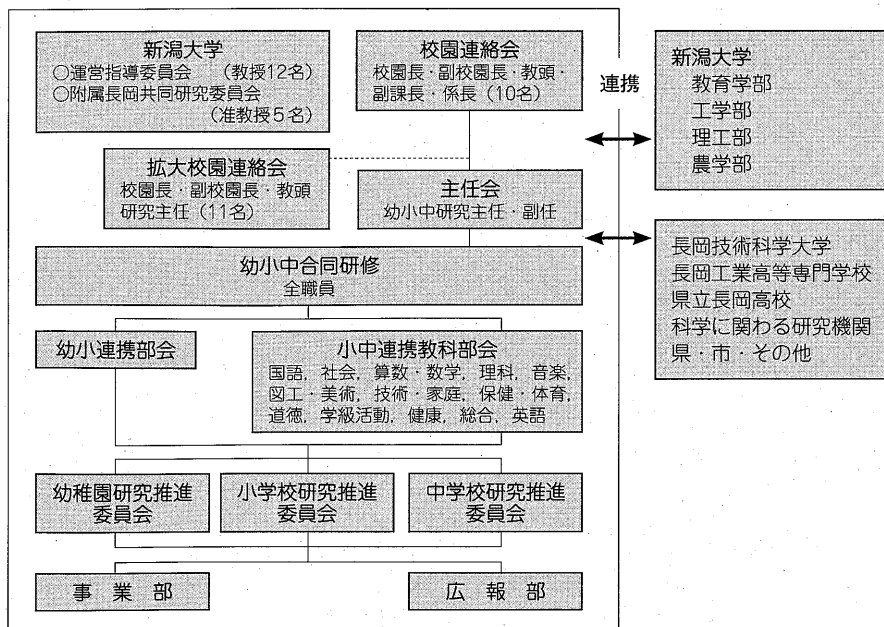
既存の概念、認識、価値観の
とらえ直しを図る



仲間とのかかわりと自己の振り返り
新たな概念、認識、価値観の創出

研究組織

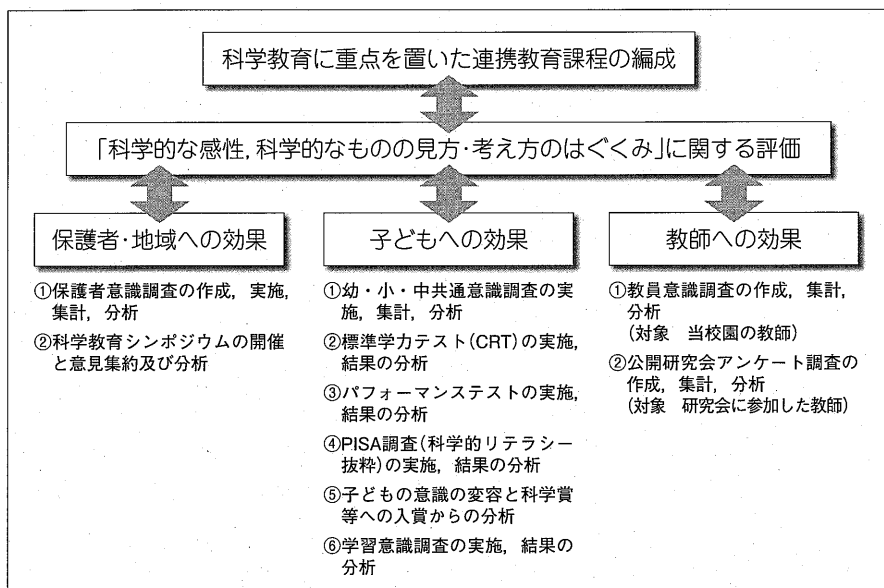
運営指導委員会及び校園内の研究組織を編成した。校園内に幼・小・中の連携に基づき3つの教科別の研修グループと評価グループを設定した。



評価法開発

連携教育課程を「科学的な感性, 科学的なものの見方・考え方」のはぐくみという観点から評価した。そのための方法の開発を行い, 実施・分析した。

なお, 研究組織の評価部がその中心となった。



※ 第1次研究の成果については, 新潟大学教育人間科学部附属長岡校園著「科学をつくりあげる学びのデザイン ～学びの壁を越える幼・小・中連携カリキュラム～」(東洋館出版社)にまとめました。

2. 第2次研究 第2年次の取組

「創造的な知性を培う」第2次研究では, 「生きて働く力としての新たな概念, 認識, 価値観」を求める。これは, 子どもの生活やその後の学習において活用され, 「はたらき」として表れる力として子どもに形成されるものである。科学教育において「科学的なリテラシー」や「数学的なリテラシー」の涵養が重視されている背景や, 新学習指導要領で, 知識・技能を活用するための思考力, 判断力, 表現力ををはぐくみを重視していることといった教育界の動向とも重なるところである。

連携研究主題で求めている子どもの姿を以上のように描き, そののはぐくみを附属長岡校園の共通の課題とする。その上で, カリキュラム改善, 授業改善の両面から研究に取り組んでいる。

カリキュラム改善

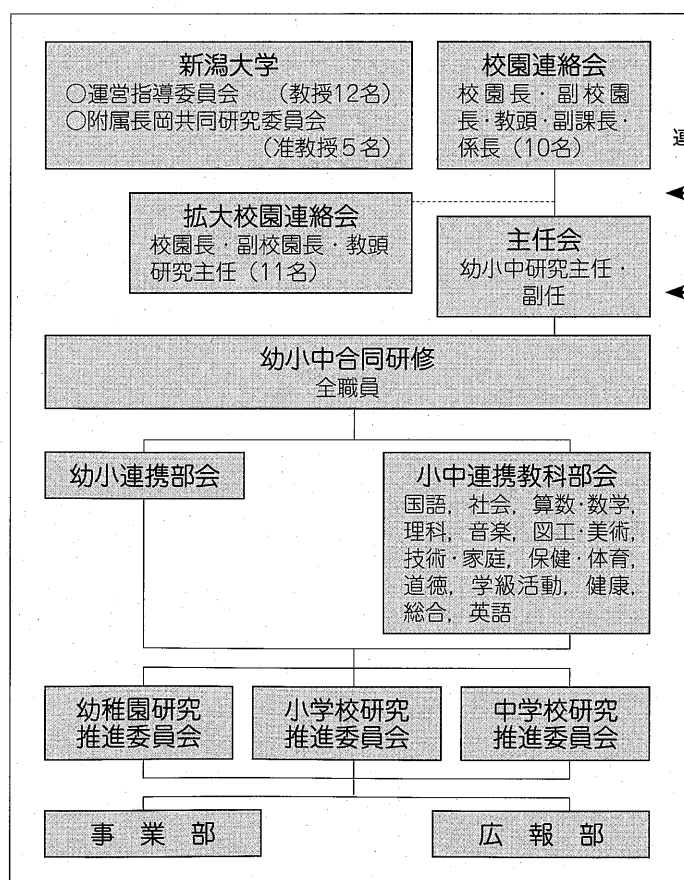
第2次研究では、科学系教科等で開発した連携教科カリキュラムを生かして、全教科・領域において開発を進める。「生きて働く力としての新たな概念、認識、価値観」に向けて思考力を中心とした資質・能力を連携の柱として、連携教科・領域グループごとにカリキュラム改善を進める。ただし、12年というスパンを、「幼小」「小中」と子どもの発達段階に応じて区分するなどして柔軟に取り組んでいる。今年度は、連携教科・領域グループごとに、はぐくみたい資質・能力の系統表を作成している。はぐくみたい資質・能力の具体として、国語科では「多様な文章を理解・評価・批評しながら読み、思考を働かせて表現する力」、算数科では、「数理を再体系化する力」を設定している。

科学系教科等が、第1次研究で作成した連携教科カリキュラムについては、内容を一部削減し、現行学習指導要領に則り、継続的に実施している。

授業改善

既存の概念、認識、価値観から、「生きて働く力としての新たな概念、認識、価値観」を創りあげるという基本的な学習の流れは各校園ともに継承して研究を進めている。環境構成、援助の在り方、学習過程、働きかけ等の具体については、各校園の研究紀要第2章に示す。

研究組織



○ 全教科の連携教科部会を組織し月1回程度の研修日を設け、継続的に研修を行う。

○ 学期に1, 2回程度合同研修会を設定し、内容の共通理解を図る。

○ 各校園の指導案検討、授業参観、授業分析会に参加し合う。資質・能力連携を進める上でも、互いの授業の在り方を理解する上でも、積極的に相互参加を進める。

○ 相互参加の調整は、連携推進委員会が行う。

○ 運営指導委員会を、校園全体の教育活動を推進していくためのものとして位置づけ、引き続き大学と連携しながら研究を推進している。